



前多敬一郎先生を偲んで

山内 章

名古屋大学農学国際教育協力研究センター長

2018年2月3日に、元農学国際教育協力研究センター教授で、当時東京大学大学院農学生命科学研究科教授であった前多敬一郎先生が他界された。

前多先生は、1985年に名古屋大学農学部に助手として採用され、その後、同大学大学院生命農学研究科、講師、助教授、教授を経て、2010年に農学国際教育協力研究センター（以下、農国センター）に教授として赴任され、その後、2012年に東京大学大学院農学生命科学研究科に獣医繁殖育種学研究室教授として赴任され、ご活躍中であった。

同先生は、研究面では動物の繁殖機能を制御する神経内分泌メカニズムに関する基礎研究を実験動物や家畜を用いて推進し、国内外で共同研究を展開し、その成果を応用し、家畜におけるさまざまな繁殖障害の治療法を開発した。さらに、各種学会の理事長、理事、編集委員長などの要職を歴任するとともに、国際雑誌の編集委員も務めるなど、国内外で、繁殖生物学あるいは内分泌学の発展に尽くされた。また、国際的なネットワーク構築に貢献するとともに、留学生や日本人学生の教育にも非常に熱心に取り組み、学生の国際的視野を広げるため、教育の国際化に力を尽くし、その過程で開発した様々な教育プログラムは後輩らによって脈々と引き継がれ、発展している。

また同先生は、本誌「農学国際協力」の誕生に決定的な役割を果たされた。農学国際協力の分野においては、具体的な事例に関して膨大な経験と知見が集積されてきたが、それらを記述した報告という形での記録は多数存在する一方で、学術論文として、それらの内容を整理し、体系化、抽象化する作業は進んでいない。多くの場合、もともと論文化することを前提に調査や協力活動が組み立てられているわけではないので、関連分野の既存の学術雑誌に掲載されるような論文を執筆することが困難

であり、そのような観点で、とくにこの分野に属する研究者の間では、既存の学術論文の要件は満たしていないが、非常に貴重かつ有用な情報や知見を何とかして論文化したいという熱い要望と、その受け皿を創る必要性の議論があった。

もともと、農国センターでは、「農学国際協力」という新しい学問分野を確立することを目標に研究活動を進めてきた。そこで、それまで同センターが定期的で開催してきたオープンフォーラムの内容を記録するためプロシーディングとして発刊してきた「農学国際協力」が、より学術性の高い雑誌として生まれ変わったのが本誌である。同先生は、農国センター、そして農学知的支援ネットワークの中でその議論を牽引し、刊行にこぎ着けた。ご自身の獣医学の研究分野の経験から、臨床現場におけるケーススタディーの積み上げがやがて新しい学問領域の創設に繋がってくるという信念の元、本誌の再出発を実現させ、初代編集委員長として活躍された。国際協力の過程で、その原動力となる、技術や研究成果を学術論文としてまとめて、本誌に掲載し、その継続が新学問分野の創出に繋がっていくことが期待される。

その成果を踏まえて、農学がその本質である総合学問としての機能をさらに発揮し、海外の生産現場に結びついていくことが、とくに食料自給率の低い我が国にとって重要であることを、先生は常に強調しておられた。同先生は、研究に対して非常に高いレベルを、同僚に、後輩に、そして学生に要求した。その結果、多くの優秀な人材を世に送り出した。微力ながら、自分たちも次世代の育成に貢献し、優れた農学研究を発展させることによって前多先生への恩返しとしたいと思う。心から前多先生のご冥福をお祈りします。